

4. 水利から見た別宮地区

大 西 宏 和

- I. はじめに
- II. 別宮地区の水利に関する概観
- III. 各集落の簡易水道
- IV. 城山簡易水道
- V. 考察
- VI. おわりに

1. はじめに

私は今回の調査を進めていく中で、杉森の地蔵水という名水に出会った。この地蔵水は水源こそはっきりしないものの、知る人ぞ知る名水であり、松任から酒作りのために採りに来る業者もある。1938年の大火で集落が全焼する以前には、酒蔵があり、杉森でも酒造りが行われていた。また、かつて大日川での鮎漁が盛んであった頃、鶴来まで捕った鮎を殺さずに運ぶことができたのは、この地蔵水だけだったとも言われている。簡易水道設立以前は飲料水としても重宝され、江戸時代から杉森の人々の舌を肥やしてきた。杉森で行った聞き取り調査では、住民の地蔵水に対する思い入れは、その歴史、水質、旨味と、とても強いものであった。この思い入れの強さに対する関心は、私が本章で水を切り口としていこうと考える直接の契機となった。

別宮地区ではないが、鳥越村には名水として名高い弘法池の湧き水がある。この2つの水以外にも、鳥越村が水にまつわる伝承の多い地域である事は、『鳥越村史』の記述からも見て取れる。1938年の大火、大日川の氾濫や1958年の大日川ダム建設、それに伴う大日川の水質の悪化という歴史的背景を持つ別宮地区は、鳥越村にあっても特に水に対する関心が強い地域なのではないかと私は考えている。私がそのように考える背景として、別宮地区が農村地帯であるという一面も挙げないわけにはいかない。水稻耕作をはじめ、農業を営む者にとって水が最大の関心事の1つである事は今も昔も変わらないだろう。

本章ではフォークロア的な記述、分析、及びダム開発やラフティングをはじめとする大日川観光開発は基本的に扱わない。ここまで駆け足で記述したことを出発点として、別宮地区の人々の日常生活に密着している水利を切り口として現在の別宮地区の集落の姿を記述分析

していく事が本章の主眼である。また、本章では別宮地区の全13集落に対して個別の記述をしていくというスタイルはとらない。私の能力的な問題もあり、本章を記述の薄いものにしてしまう恐れがあるためである。本章では、地理的に隣接していて相互関係の見て取り易い杉森、神子清水、相滝の3集落、多集落にまたがる簡易水道として他の簡易水道とは性格を異にする城山簡易水道に焦点を当てていく。

II. 別宮地区の水利に関する概観

1. 農業用水

別宮地区のような農業地帯における水利としては、農業用水がまず考えられる。別宮地区を私は農業地帯と位置づけているが、厳密に言えば、現在の別宮地区は山村部と農村部に大別する事ができる。ここで扱う農業用水とは、その農村的性格の強い地域のものであることを断っておく。集落の境界と水田所有の境界は必ずしも一致してはいないので、具体的に集落名を挙げてここで扱う地理的な範囲を限定する事は難しいが、以下の農業用水に関する記述は、およそ相滝や渡津より下流部に関するものである。

まず、別宮地区の農業用水について概略をおさえておくべきであろう。別宮地区の農業用水が本格的に整備され始めたのは、およそ大正末期から昭和の初頭にかけてである。この時期以降、1934年の大水害をはじめとし、台風や河川の氾濫といった自然災害などを契機として農業用水は順次整備されていくこととなる。大部分がコンクリート化していく以前の農業用水は、『鳥越村史』の記録によると、丸太と柴木を組み合わせで堰堤を造った「かわくら芝せぎ造り」が主流であったらしい。また、別宮地区全体の概観として、農業用水の維持管理費用などは各集落が集落全体で賄い、運営していたという点は、現在でも変わっていない。鳥越村全体として第1次産業従事者が1970年代以前は過半数を占めていた（1章の表4参照）ということも合わせて考えると、農業用水が住民の主な関心事の1つであったことがうかがえる。しかし、私がここで注目したいのは、その維持、運営が集落単位であった点である。現在の「えざらい」と呼ばれる農業用水の掃除においても、その範囲は集落の区切りをその境界としている。誰が耕作しているか、誰が所有しているかということとは関係ないのである。例えば、相滝の農家が耕作している田の農業用水であっても、その田が別宮出の敷地内であれば、別宮出の住民が「えざらい」をするのである。また、稲作に関係のない人間も集落行事としてこれに参加している点は、集落としての結びつきの強さの名残であろう。

さて、ここからは現在の農業用水がどのような性格のものであるのかという点に関して、まず相滝の事例から見ていく。この集落を選出した理由をまず簡単に記しておく。相滝は別

宮地区で今や2軒となってしまった中核農家の内の1軒が日常的に利用している農業用水があり、綿密な聞き取り調査及び現場見学もできた点が理由である。相滝の農業用水は堂川、益谷川に5つの堰堤を築いて取水している。ポンプなどの電機動力は用いず、土地の勾配と水量調節のみで農業用水に水を流しているのも、堰堤はそれぞれの農地よりかなり上流に位置する。その水量調節は取水口付近にあるバルブで行い、そこから取水する農業用水を田に引いて実際に稲作に携わっている中核農家の人が行っている。近年の減反政策の影響で休耕地が出てきているが、そこを通る農業用水にも水を流す。流水は用水をきれいに保つ作用を持つためである。私は農業用水と一括りにしているが、実際は田畑に水を入れる用水と水を抜く用水の2種類の農業用水がある。さらに水を引く農業用水には、取水口から田畑の近くに水を引く、土手の上を流れる「大用水」と呼ばれるものと、大用水から田に水を引く「用水」と呼ばれるものがある。名前ほど大きさに違いはないのだが、別々の呼称が用いられている。「えざらい」が行われるのは「大用水」までであり、集落が万籬を人夫賃などを賄う運営資金に当て、管理している。相滝の「えざらい」は、春から秋までの各季節に1回集落総人夫で行われ、集落の人々が集う行事の1つとなっている。集落の人々にとっての「えざらい」が果たす社会的機能として、集落としての結びつきが顕在化される行事であるということが言える。しかし、これは見方を変えると、農業用水が日常的には疎遠なものになったと捉えることが可能であるし、実際そうなのである。ここまで相滝を事例として、別宮地区の農村地帯における農業用水と集落が担うその管理、運営に関して記述してきたが、当然他の集落では相滝とは異なる部分もある。例えば、別宮出は農業用水を大日川からポンプで引いているという特徴があり、その取水方法という点で相滝とは異なる特徴を有す。また、神子清水や渡津、左礫は北陸電力神子清水発電所からの分水権を得ていて、農業用水及び生活用水の水量などは北陸電力神子清水発電所が管理しているという特徴がある。このように農業用水のあり方も集落毎にそれぞれ特徴があるが、相滝の事例で別宮地区の農業用水についての概観は、ある程度できたのではないだろうか。

2. 下水道

ここでは下水道という行政的な水利を通して、この地区を概観していく。まずその背景として下水道の普及率などハードな情報から記述していく。現在石川県下水道普及率は約57%であり、全国では13番目の普及率である。鳥越村の下水道普及率は48%であり、全国平均の62%¹⁾や石川県の平均のそれと比較すると幾分低い普及率である(表1)。しかし、鳥越村は三ツ瀬や数瀬をはじめとする山村地域を抱える地方自治体であるという点や、人口が少なく、1人当たりの全体の数値に対する割合が大きいことを考慮すれば、それほど低い普及率であるとは一概には言えないのではないだろうか。以下では、下水道事業の基本的な性格と、下水道事業を通して別宮地区の一側面を記述する。

表1 石川県、金沢市、及び白山麓1町5村の下水道普及率

自治体名	鶴来町	河内村	吉野谷村	鳥越村	尾口村	白峰村	金沢市	石川県	全国平均
普及率 (単位: %)	51	—	65	48	15	76	83	57	62

出所：財団法人日本下水道協会ホームページ。—は整備されているが未使用。

この下水道事業は地方自治体が建設、管理をしていく事業である。鳥越村では国からの補助金、起債と言われるいわゆる地方債、住民による分担金、村の財源である一般財源の4種類の財源が充てられている。県からの補助は、起債の返却に対して一定の割合で補助が出るという形で使用されるため財源としてあるわけではない。幹線工事における住民の分担金では、幹線が通らない集落も一律の出資をしている。しかし、下水道事業における住民の負担はこの分担金だけでなく、幹線と各戸を結ぶ工事費用及び家の中の排水管工事も含まれる。それらは住民にとって大きな負担であった。そのため下水道の幹線は通っているが、自宅の配水管がそこにつながっていないという状態もあり、下水道幹線工事の完成と住民の下水道利用開始は同時ではなかった。幹線工事後の利用開始までの期間には、同じ集落内にも差があり、杉森では全戸が下水道を利用するようになったのは幹線工事終了の数年後であった。

次に別宮地区における下水道事業についてもう少し具体的に見ていくことにする。

下水道整備以前の別宮地区では、浄化槽さえ経済力のある世帯が持つ程度の普及率であり、便所は汲み取り式が多く、生活排水は各戸の脇を通る生活用水あるいは大日川に流しているという状況であった。生活用水の整備は1975年から1989年にかけて村役場の工事課が担当して推進された。生活用水の役割は、生活排水路であると同時に食器洗いや洗濯、畑で取れた野菜を洗ったりしていただけてだけでなく、冬には融雪溝の役割も果たしていた。生活用水のコンクリート化に伴い、蛍など水辺の動植物は見られなくなり、下水道が完備された地区では、現在生活用水は冬の融雪溝の役割ぐらいしか果たしてはいない。

鳥越村で下水道整備への気運が高まってきたのは、1980年代末であった。国政及び県政の影響もあり、衛生観念が住民間に高まりを見せ、下水道整備へとつながっていった。当時を知る人には、不衛生イメージの払拭には若者を村につなぎ止めておく効果も期待していた所があった、と言う人もいる。1980年代末という時代は、若者が都市に集中するという人口動態が確立され、高等学校を持たない鳥越村でもその影響は小さくなかったと考えられる。

鳥越村には6つの下水処理区が存在する。吉原、中部、大日、若原、城山、河野の6処理区である。この6つの処理区は、それぞれが処理施設を有し、幹線工事の単位でもあった。別宮地区では別宮、別宮出が城山処理区に、杉森、相滝、神子清水が大日処理区に属する。鳥越村の下水道整備事業は1989年に吉原地区からスタートし、全下水道処理区の幹線工事が完了したのは1998年であった。別宮地区に限れば、1993年度に相滝、その翌年度には

杉森と神子清水の幹線が完成し、1995年度に別宮出、その翌年度にかけて別宮の幹線工事が完成している（表2）。

表2 下水道事業の推移実績

	吉原	中部	大日	若原	城山	河野
1989年度	処理場用地					
1990年度	処理場 綿ヶ滝					
1991年度	処理場 上吉谷・西佐良					
1992年度	三ツ屋野 河原山	処理場用地	処理場 相滝			
1993年度		処理場 下野	杉森 神子清水	処理場 若原	処理場用地 下出合	
1994年度		処理場 上野・手取			三坂・下出合・ 上出合	処理場用地
1995年度	下吉谷	釜清水			処理場 別宮・別宮出	処理場 広瀬
1996年度		釜清水			別宮	瀬木野
1997年度		上野保育園				河合
1998年度		上野保育園			「青い鳥」	ファミリー鳥越

出所：鳥越村下水道事業実績内訳表

表中の集落名などは、その集落等で下水道幹線工事が行なわれたことを示す。

下水道の利用は同じ集落内でも利用の開始に幾分の差があったこと、役場が管理運営に当たっていることは、前述の通りである。ただし、利用料金の集金に関しては大きく3つの形態がある。個人預金からの引き落とし、役場へ村民が来て行う直接納入、そして集落で集金したものを役場に納入するという3つである。別宮地区の特徴としては、集落ごとで集金をする役職に違いはあるものの、3番目の形態が主流である。また、役場側としてもこの形態が最も望ましいようだ。その理由は滞納がほとんどない点にある。これは別宮地区に見られる地域的なつながりの強さから、滞納すると集落内での体裁が悪くなってしまうことに起因する。この形態にメリットがあるのは役場側だけではない。役場から集落で集金した戸数に応じて報奨金が支給されるというメリットが集落側にはある。この報奨金は集落の財源として利用されている。

下水道整備が住民に与えた影響は、生活水準の向上だけではなかった。以前の生活用水と違い、自分たちより下に住む人々に対して配慮する必要がなくなったことから、住民の排水

マナーは驚くほど悪化したという意見も聞かれる。日常生活の快適さを得ることと引き換えにマナーやモラルが失われていくという図は、日本社会の縮図にも見える。それでは、最後に下水道処理区に含まれない山村部について記述していく。

別宮地区の山村部（具体的な集落として渡津、左礫、三ツ瀬、数瀬、阿手、五十谷、柳原、野地）が、下水道処理区に入っていないのは、集落が点在する上その世帯数が少なく、経費的な問題がある点、高齢者が多く、将来的な見通しが立たない点に理由がある。このような状況は別宮地区に限ったことではなく、石川県内、全国にも同様のケースは多々存在している。このような地域では、下水道の代わりに合併処理浄化槽が設置されている。浄化槽には、この合併処理浄化槽と単独処理浄化槽という大きく2種類がある。単独処理浄化槽とは、し尿のみを浄化するものであり、合併処理浄化槽はし尿のみならず、台所排水など生活排水全般を浄化する役割を持つ。別宮地区では浄化槽を通った排水は生活用水ではなく、近くに流れる川の本流までパイプで運ばれて排出される。この合併処理浄化槽が別宮地区の山村地域で普及しているかという点、そうでもない。鳥越村は下水道幹線工事の際、住民の分担金としてこの地区の人々からも集金をしている。これは合併処理浄化槽を設置する際の費用を、家の中の排水工事以外は全額補助してもらえという形でこの地域の人々には還元される。しかし、現在でも合併処理浄化槽の普及は進んでいない。下水道処理区のような面的なシステムに比較して、浄化槽の性格から個人的な意思が強く反映されるうえ、この地域では高齢者世帯が多く、将来性の乏しい投資に対して肯定的な立場を取らないことが主な理由である。特に後者はこの地域が抱えている問題も反映していると言える。

3. 上水道

ここでは次節以下で行う別宮地区の各簡易水道についての記述の背景として、その概要を記す。別宮地区の上水道は、全て簡易水道であるという事実を最初に押さえておかなければいけない。簡易水道とは、計画給水人口が101人以上5000人以下の上水道事業を指す。その事業の経営主体は、全国的に見ると地方自治体であるケースが大半である（表3）。別宮地区の簡易水道も経営主体は鳥越村である。また、別宮地区において前述の簡易水道の事業規模に該当するものは、その画給水人口（表4）、原水の種類（表5）、料金体系（表6）、配水方式（表7）においても、全国的にはどれも標準的な簡易水道である²⁾。

その中でも別宮地区の簡易水道の大きな特徴は、集落の自治性が極めて高い点である。別宮地区においてそれぞれの簡易水道が給水している範囲は、その簡易水道を運営している集落の境界と一致する。また、簡易水道の計画給水人口基準に満たない規模の集落もそれぞれ独自の水道体系を有している。つまり、別宮地区では集落ごとにそれぞれが水源を持ち、生活に必要な水を得ているという体制を採っているのである。その水道設置から水道料金や水源管理、配水タンクや水道管の管理に至るまで各集落が担っていて、各集落が果たしている

役割は大きい。ただし、集落だけでそれぞれの簡易水道を維持していくことは、経済的に極めて困難である。例えば、工事資金や水質検査の資金は（集落側からすれば）村からの補助がなければ成立しない。また、村としても重点施策の1つとして「豊かな生活環境整備の推進」を掲げ、下水道事業とともに簡易水道事業をその具体的な推進項目として予配措置をしている。つまり、別宮地区の簡易水道の経営スタイルは、各集落の自治性が非常に高く、村がそれを全面的にサポートするという体制であるようにも見る事ができる。

表3 日本の簡易水道における経営主体別事業体数

経営主体	事業体数	全体に対する比率(%)
県	3	0.0
市	1395	15.1
町	4763	51.6
村	1555	16.8
一般事務組合	541	5.9
自治会等組合	883	9.6
私 営	96	1.0
計	9236	100

表4 日本の簡易水道における計画給水人口規模別事業体数

計画給水人口 (人)	事業体数	全体に対する 比率(%)	本章で扱う 簡易水道
500 未満	4959	53.7	杉森、相滝、 神子清水
500 ～ 1000	1579	17.1	
1000 ～ 2000	1194	12.9	城山
2000 ～ 3000	556	6.0	
3000 ～ 4000	359	3.9	
4000 以上	497	5.4	
無 回 答	92	1.0	
計	9236	100	

表5 日本の簡易水道における主な原水の種類別事業体数

原 水 の 種 類	事業体数	全体に対する 比率(%)	本章で扱う 簡易水道
表 流 水	2814	30.5	
地 下 水	4517	48.9	杉森 相滝 神子清水、 城山
そ の 他	1818	19.7	
無 回 答	87	0.9	
計	9236	100	

表6 日本の簡易水道における1 m³あたりの使用料金事業体数

使用料金(円/m ³)	事業体数	全体に対する 比率(%)	本章で扱う 簡易水道
50 未満	654	7.1	城山
50 ～ 100	2268	24.6	
100 ～ 150	2916	31.6	相滝
150 ～ 200	1932	20.9	
200 以上	1207	13.1	
無 回 答	259	2.8	
計	9236	100	

表7 日本の簡易水道における配水方式別事業体数

配 水 方 式	事業体数	全体に対する 比率(%)	本章で扱う 簡易水道
自 然 流 下 式	7060	76.4	杉森、相滝 神子清水、 城山
ポンプ加圧式	11021	11.1	
併 用 式	914	9.9	
無 回 答	241	2.6	
計	9236	100	

表3～7の出典：全国簡易水道協議会がインターネット上で公開しているデータ

Ⅲ. 各集落の簡易水道

本節では杉森、神子清水、相滝の3集落に焦点を当て、別宮地区における上水道のあり方を見ていく。

1. 杉森の簡易水道

杉森の簡易水道が現在の形態になったのは1967年である。まず、現在の簡易水道以前の杉森の上水道事情について言及していく。杉森にとっては、現在の簡易水道が初めての水道ではない。1950年代前半に、集会場の裏手にある共同の井戸を水源とした簡易水道が設立されていたのである。これが集落としては初めての上水道であり、集落ごとに簡易水道を持つという現在の別宮地区の特徴は、当時すでに確立されたスタイルとなっていた。この簡易水道が設立される以前は、井戸と集落の中程に位置する地蔵水が住民の生活を支える水源であった。ただ、杉森の地下には岩盤が走り、井戸を掘れない家が大半であったため、実質的に地蔵水が果たしていた役割は大きかったと考えられる。

1964年に別宮地区は渇水に見舞われた。水質のみならず水量も豊富であるとは言えなかった当時の簡易水道は、ここに大きな転機を迎えることとなる。より水質が良く、水量の豊富な水源を求めて、翌年から水源探索の調査が開始される。1966年には現在の水源である矢谷川上流の岩盤の裂け目に水源を発見した。この地は杉森の飛び地であり、この水源は水質、水量ともに極めて良質であった。恵まれた水源を得た杉森では、簡易水道が翌年の1967年から給水を開始して現在に至る。配水タンクは集会場の裏手上方に設置され、サイフォン方式で水源からここに送水され、ここから各戸に配水されている。この配水にもポンプなどの電機動力は使用されておらず、傾斜のみで配水されている。1993年には第2水源が開発され、ここでは送水動力としてポンプが設置されているが、この第2水源は矢谷川上流の第1水源が枯れた時の予備的なものであり、現在でも使用する機会はない。自らの集落を賄ってまだ余裕がある水源を抱えているにもかかわらず、大きな費用をかけて（村からの補助も少なからずあるのだが）第2水源を開拓した姿勢には、水に対する幾分過剰とも取れる危機感があるようにも感じられる。

ここからは現在の杉森において簡易水道がどのように運営されているのかという点に言及していく。前節で記したように、別宮地区の各簡易水道の経営主体はあくまでも鳥越村であり、実際の運営をしているのが各集落という形態を採っている。実際の運営にあたって、集落では様々な仕事をしている。その1つに水道料金の徴収がある。杉森の水道料金は定額制であり、1995年に杉森集落内の全戸が水洗トイレへの移行を完了する以前は、トイレが水洗の世帯は月額1500円、汲み取り式の世帯は月額1000円であった。1995年以降は、全戸一律で月額1500円となっている。この水道料金の徴収は、集落の会計係の仕事であり、

水道の維持管理費に充てられている。維持管理費の主なものとして毎月の水質検査の費用が挙げられる。これは水道法に基づき保健所が行うものであり、村から半額の補助が出るが、それでも集落としては大きな負担となっている。また、第2水源の工事の際も総工費の10%を集落で負担している。経営主体は村であるが、集落の経済的な負担も少なくはない。

実際の仕事は、経済的な側面にとどまらない。集落として行う水源視察もその仕事の1つである。杉森の場合、年3回から2回の水源視察を行う。4月の用水清掃の時と7月の道路愛護の時に希望者全員で水源視察に行く。年に3回の水源視察を実施する年は、この2回に加えて、11月にもう1回行われる。また、簡易水道にトラブルが発生した場合、集落総人夫でその処理に当たる。1970年代末に杉の根が水道管を持ち上げて水漏れが起こるというトラブルが発生した。この時は、やはり集落総人夫で水道管の破損箇所の調査を行っている。今後も集落が果たしていく役割は大きいと考えられる。

また、上水道の工事を主導する、簡易水道の経営主体である鳥越村の役割が大きいことは言うまでもない。1983年には、道路拡張工事に伴い水道管を鉄製にする工事を行っている。それからそれほど時を置かずして1987年、そして第2水源開発のあった1993年には杉森簡易水道の配管一部布設替えが行われている。この2者の協力体制は、杉森簡易水道だけではなく、前節でも述べたとおり別宮地区の簡易水道全体の特徴である。

最後になるが、杉森の簡易水道に対する住民の意識についても少し触れておく必要がある。杉森の簡易水道の特徴は、サイフォン方式の水道である、水量が豊富で水圧が強い、などが挙げられるが、住民は特に水質の良さを強調する傾向がある。しかし、2001年度10月の水質調査で、飲料水としては全く問題ないが、残留塩素の量が水道法22条を満たさないという結果が出た。これにより杉森の簡易水道では2002年度より塩素を人為的に加えなければいけなくなった。経営主体が村である以上、これは実行しなければならないが、杉森の人々にとっては、味が落ちる、経済的負担が増大するという2つの面のデメリットに対する不満がある。地蔵水、矢谷の水が、杉森の人々の舌を肥やしてきたという点、集落が簡易水道に果たす役割の大きさが、この不満の背景にあることは見て取れるであろう。また、水道水を融雪用の水として使用しないように集落で決めている点、渇水対策の第2水源の確保などにも、杉森の人々の水に対する意識の高さを感じずにはいられない。

2. 神子清水の簡易水道

神子清水の集落名の語源は、『鳥越村史』によると「ムコシミズ」つまり「向こうの清水」とあるという。集落にその名が付けられた時代よりこの地方の清水(しょうず)は有名であった。また、この集落自体は、杉森と同様に地下が岩盤であり、井戸を掘ることができず、清水を中心に人が集まり、これを取水場として形成されてきた集落であるという歴史を持つ。この集落の伝統的な産業であった紙すきについては18章で詳述しているが、取水場周辺に

数軒の紙洗小屋が存在していたという点にもこの集落が清水を中心に形成されてきた集落であることが垣間見られる。神子清水集落内に湧き出る清水の水源は、はっきりとはしていないが、岳峰の山水が清水となって湧き出ているようだ。杉森の地蔵水と水源を同じにしている可能性が高い。杉森の地蔵水の水質が良いこと、それを杉森の人々が自認している点は前述したが、同じ山からの清水を得ている神子清水という集落においても、当然同様のことが言える。

神子清水もまた、杉森同様集落規模の簡易水道を運営している。この簡易水道の第1水源はこの清水である。神子清水における簡易水道の簡単な歴史から見ていく。1950年代後半、大日川ダム建設工事が集落内の上水道設置への気運に対して後押し的な役割を果たし、神子清水には現在の簡易水道の前身的なものが存在していたと言われる。公式な資料において存在を確認できた現在の簡易水道が新設されたのは1970年であり、その翌年から給水が開始されている。簡易水道設立の直接的な契機はなく、時代の流れという曖昧な見解がまかり通っている。しかし、この新設された年から、私は杉森簡易水道の設立がその背景に大きな影響力を持ってあったのではないかと考える。後述するが、杉森、神子清水、相滝の隣接する3集落の間に、競合意識に近い、ある種の緊張感のようなものが存在していることを考慮すれば、その可能性は否定できない。

杉森と同様にこの神子清水にあっても人々の渇水への不安は見られた。第1水源はそれほど豊かな水量を持っていなかったため、1991年に神子清水集落と矢谷川の間地点に第2水源が設けられ、第1、第2両水源から取水可能な体制が整えられた。ただ、この第2水源は水量がそれほど豊かではなく、夏場には枯渇することもある。2001年現在では、人口、世帯数の減少により、第1水源のみで神子清水集落を充分まかなえるため、この第2水源が使用されることはほとんどない。前後するが、1992年には配水タンクが増設され、1993年には水道管が石綿管から塩ビ管に変えられた。これは旧来の水道管では、冬季には水道管の凍結や破裂がしばしば起こっていたことによる。2002年度からは、杉森と同様に配水タンクへの消毒液注入がスタートすることになっている。繰り返すが、これらの工事等は集落ではなく鳥越村の主導で行われている。

この簡易水道では、取水する地点が配水タンクよりも低位置にあるので、電機動力を利用して配水タンクまでポンプアップする形態を採っている。本章で取り上げる簡易水道で、このような電機動力を利用しているのは神子清水簡易水道のみである。また、配水タンクからは傾斜を利用して各世帯に送水されている。第2水源に関しては取水地が配水タンクより高い位置にあるので、傾斜のみで送水が行われている。神子清水簡易水道で特筆すべき点は、集落の役員として、1980年代末まで水道係というポストが存在していたことである。現在では、水道係の仕事の経理的な仕事は会計が行い、点検などの仕事は区長が担っている。神

子清水の水道料金は定額制で、月額 1000 円を区の会計が集金している。万雑から出る費用と併せてこの水道料金は、簡易水道の水質検査費用、消毒液や工事費などに充てられている。また、水源や配水タンクの視察は、これまで区長が不定期に行っていたのであるが、2002 年度からは前述の通り配水タンクに消毒液を入れることになるので、定期的な点検が必要となる。区長の負担増大を防ぐためにも、水道係が神子清水に復活する可能性がある。

簡易水道としてのあり方は、鳥越村を经营主体としている点で杉森を始め他の簡易水道と同様である。また、杉森と比較すると共通して見られる住民意識なども確認できるが、その現実的なあり方としては自治性が強く、お互い近隣の集落とは一線を画しているように見える。

3. 相滝の簡易水道

ここでは、杉森、神子清水の簡易水道との比較を意識して相滝のケースについて記述していく。相滝の水利の歴史を見る上で、この2つの集落と決定的に違うのは、相滝は地下水が豊富であった点である。杉森、神子清水では地下が岩盤であり、井戸を持つ世帯がほとんどなかったのに対し、相滝ではほぼ全戸がそれぞれ井戸を所有していたため、前者のような共同の取水場が存在しなかった。簡易水道以前の状況は、このように全く異なるが、簡易水道の設立は杉森と同年の 1967 年（杉森は 4 月、相滝は 7 月）である。直接の契機は特になかったらしいが、この時代は 1955 年に始まる高度経済成長期が成熟を迎え、国民の生活水準が全国に上がっていく時代であったということから、この地域でもその傾向があったという見解は否定できない。簡易水道が村営であることを差し引いても、その自治性の高さを考慮すれば、「この時期に」という視点よりも「同じ時期に」という点に注目した方が、この隣接する 3 集落間の関係を見る上で有意義なのではないだろうか。

相滝簡易水道の水源は益谷川上流の山水である。この水を相滝の人々は「男水」と呼ぶ。この水源探索は、集落総人夫で行われた。このことから、集落の結束力と水に関する関心が高かった事が窺える。これが第 1 水源であり、1992 年頃には相滝にも第 2 水源が設置されている。また、これに伴い取水地の濾過機能設備を改善する工事も行われている。他の 2 集落と異なり水源からの取水を川底から行っているのも、水の出が悪くなったり、雨が続くと少し水が濁ったりという事もある。特に集落でも高い位置にある家では、今でも年に数回は水の出が悪くなることがあるそうだ。しかし、この自然との共存こそ相滝簡易水道の最大の特徴である。水の流れであるが、水源から水は集落でも高い位置にある松岡寺のさらに上方に位置する配水タンクに送水される。ここでは水源から配水タンク、配水タンクから各世帯へと傾斜のみで送水し、電機は使用していない。

相滝の水道料金は杉森、神子清水のような完全な定額制ではない。月額で 15 m³までは 1500 円、15 m³以上は 1 m³につき 110 円となっている。これに加えて、水質検査費用を各

世帯が半期に 3000 円負担している。これらの合計額が年 2 回、1 月と 8 月に万雑と一緒に集金される。水道料金の管理は区の会計の役割であり、各世帯についている上水道のメーターの読み取りは区の役員も協力するというフレキシブルな体制が採られている。この水道料金の用途は他の集落同様、工事費や水質検査、2、3 年前から開始された滅菌のための薬品投与の費用などに充てられている。また、水源と配水タンクの視察は、区長が年に数回不定期に行っている。簡易水道自体の特徴は、杉森、神子清水との間に相違が見られるが、運営という点では共通する部分が多いと言える。

ここまで見てきた 3 集落における簡易水道は、その利用地域と集落が同一であり、そのため集落による自治性が高かった。またその一方で、隣接している 3 集落の間では、その設立や補修工事など比較的平行して発展してきた歴史が見られた。

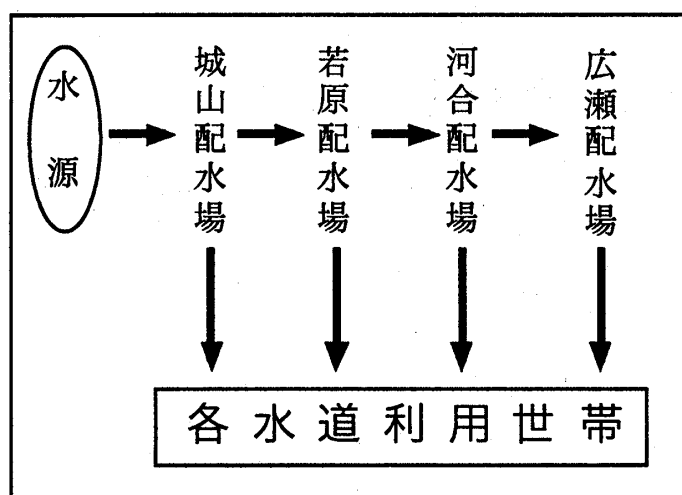
IV. 城山簡易水道

城山簡易水道は、これまで記述してきた簡易水道とは異なり、集落の境界を越えた地域をカバーする簡易水道である。別宮地区では別宮、別宮出がこの簡易水道を利用し、別宮地区以外でも釜清水、上野、河合、瀬木野、上河合、若原、ファミリー鳥越、広瀬とかなり広い地域がこの簡易水道による給水を受けている。また、経営主体が鳥越村である点は別宮地区の他の簡易水道と同様であるが、簡易水道組合という形でその運営がなされている点で、それらとは異なる。

城山簡易水道設立以前の状況は、各集落で異なる。別宮、別宮出は地下水が豊富な集落であり、ほとんどの世帯が井戸を所有していた。これに対して上野は地下水に乏しく共同井戸を利用し、釜清水はさらに地下水に乏しく井戸がなかったため、弘法池を取水場としていた。広域の簡易水道である城山簡易水道の構想は、1964 年の渇水に端を発する。当時、杉森、神子清水、相滝における簡易水道を統一するという行政の計画があったのだが、それがこの 3 集落の反対に遭って決裂した事も、この構想が始まった背景として見逃すことはできない。1978 年に福井県大野市で起こった大渇水を契機に、別宮、別宮出、釜清水、上野の 4 集落で工事が始まり、同年秋に完成している。設立当初の給水人口は、4 集落約 200 世帯 1000 人に加えて村役場や学校などの昼間人口約 300 名であった。設立以降 1979 年に河合、瀬木野へ、1981 年に上河合、1982 年に若原、1999 年にファミリー鳥越、2000 年に広瀬へと順次その給水地域を拡大してきた。設立当初の構想は、下出合、下野、三坂にこの簡易水道が拡大されれば完成するのであるが、これらの集落は地下水が豊富な地域であるため難航しているのが現状である。

次にこの城山簡易水道の概略について記述しておく。水源は別宮地区の野地にあり、その水質は良く、水量は極めて豊かであり、5000人から6000人は余裕を持って賄えるだけの水量がある。配水方式は、水源から配水場、配水場から各世帯まで土地の勾配のみを利用する自然流下式である。配水場は城山、若原、河合、広瀬の4ヶ所存在するが、この間も電機動力は使用していない³⁾(図1)。これらの配水場は、給水地域の拡張に伴い順次建設されていった。城山がこの簡易水道設立当初に配水場とされたのには以下のような経緯があった。城山簡易水道が設立される2年前、1976年の小学校統合の際、小学校建設地に城山が挙がっていた。城山にはその歴史性以外にも、別宮及び別宮出、釜清水、上野という4集落の中心に位置するという地理的利点があった。結局はその標高の高さが通学等に不便であるということから、城山に小学校は建設されなかったが、その難点であった標高の高さと4集落の中心に位置するという地理的な利点は、どちらも配水場建設には理想的な条件であった。こうして城山に白羽の矢が立ったのである。

図1 城山簡易水道の水の流れ



この4集落が拠点となり、城山簡易水道は展開されていくのであるが、前節で記述したように、その設置や補修の工事に対しては行政が資金の大部分を負担し、同時に当簡易水道利用者がその4分の1を負担する。これが約50万円ほどであり、組合加入年内、つまり城山簡易水道の給水を受け始める年、その年内に役場へその半額を納入するという形態を採った。残りの半額は水道料金を少し高めに設定して長期的に支払っていくという仕組みである。また、幹線と各世帯を結ぶ工事も各世帯の負担であり、下出合、下野、三坂が組合に加入しない主な理由には、自分の集落で水がまかなえるという事と連動して、この経済的な負担の大きさがある。組合への加入は基本的に集落単位であり、水道料金の集金もまた集落単位となっている。各集落内での集金係は集落によって異なるが、集められた水道料金は農協の口座に

振り込まれる。水道料金は、簡易水道設立当初は1ヵ月10㎥までは1000円、それ以上は1㎥につき30円が加算されていた。現在では1ヵ月15㎥まで700円であり、それ以上は1㎥につき20円が加算される。この水道料金の安さは、城山簡易水道の特徴の1つである。城山簡易水道の特徴はそれだけではない。設立当初から将来的な給水地域の拡張を視野に入れた水道管工事を行ってきた点、防火水槽が極めて効率的に配置されている点なども城山簡易水道の特徴と言える。つまり、城山簡易水道が集落の境界を越えた簡易水道として利用されている背景には、豊かな水量と水質に加え、低料金で集落の防火対策という面で秀でているという特徴があり、この給水地域の拡張は、城山簡易水道設立当初の構想に沿った先行投資的な工事が行われて来たということによって可能になったのである。

これだけ広域をカバーする城山簡易水道は、日常の管理運営という点でも前節で記した集落ごとの簡易水道とは異なる。もっとも異なる点は、集落の境界を越えているため、城山簡易水道は「組合」という形式をしっかりと持っていることである。簡易水道設立当初、組合長は無償でその任を続けてきたが、組合が軌道に乗った現在では、組合長には高額ではないものの組合から報酬が支払われている。また、各集落には2人ないし3人の役員がいる。彼らには日常的な仕事はないが、冬季の水道管凍結による破損などのトラブル時の協力要員としての役割を担う。また、日常的な仕事にも現在ではほとんど人件費がかかっていない。組合全体として人件費⁴⁾は年間100万円未満であるという運営形態は、城山簡易水道の低料金を支えている要因の1つである。城山簡易水道には4ヵ所の配水場がある。これらの日常的な管理運営は、現在ではコンピュータで統御されている。各配水場、水源に設置された機械が、水量などの基本的なデータを常時記録用紙に記録し、役場に設置してある中枢のコンピュータに信号が送られる。異常があれば、役場に常駐している補助職員から組合長に連絡がいくという体制を採っている。この役場に設置してあるコンピュータで各配水場、水源の水量調節など様々な操作が可能となっている。現在の水源視察は季節によって頻度が変わるが、1年で平均して月2回程度、各配水場の視察は1年に2、3回である。改良に改良を重ねて構築したこのシステムにより、組合長の負担は設立当初と比較して10分の1程度になったとのことである。

ここまで城山簡易水道について記述してきたが、最後に私なりの城山簡易水道の位置づけを明確にしておく。本節で私が城山簡易水道を取り上げたのは、集落を越えた簡易水道が現実的に機能している事例として示すという意図による。別宮地区の簡易水道の特徴として集落による自治性が極めて高いという点を、前節ではかなり強調して記述してきたつもりである。別宮地区の別宮、別宮出を含む城山簡易水道は、別宮地区の集落が利用する簡易水道のあり方に対する1つの反例である。また同時に、これからの別宮地区における簡易水道がそのスタイルを変えていくとするならば、1つのあり方の可能性を城山簡易水道は示唆してい

ると位置づけることができる。

V. 考察

別宮地区の上水道のあり方の特徴は、これまで再三強調してきたように各集落の果たしている役割が極めて大きい点にある。その一方で、城山簡易水道のような集落の境界を越えた簡易水道へのシフトが考えられていないわけではない。特に本章で取り上げた杉森、神子清水、相滝の3集落に関しては、前節でも少し触れたが、統一簡易水道とするという動きがある。これは行政側の描く青写真であり、この3集落が隣接しているにもかかわらずそれぞれ別の簡易水道区を形成しているという事に端を発している。2001年度にも、鳥越村から集落側に対してこの提案がされている。行政側とすれば、この簡易水道を統一することにより水質検査費などのコストダウンが図れるという利点がある。また、集落としても簡易水道の利用者が多いほど、個人にかかる経済的負担が軽減されるし、現在の水源の内2つは予備水源として確保できるという利点がある。行政側と集落住民の双方に利点が見られる統一水道区へのシフトが、杉森、神子清水、相滝で実行されない理由についてここでは分析していく。

この3集落の水源を統一し、1つの簡易水道区を形成するとすれば、その水源は最も水量の豊富な杉森簡易水道の水源を利用することになる。杉森は神子清水に対して加入を促しているが、神子清水側はこれに難色を示している。これまで見てきたように水道の幹線工事は、基本的に住民の工事費負担が発生する。杉森の簡易水道を延長すると、杉森以外の集落のみが工事費を負担しなければならないという状況が起こる。また、神子清水側からすれば、水道料金の納入先が、自分の集落ではなく杉森に変わる。実際には同じ水道区になるので、システムとして構造的な変化はないものの、杉森に水道使用料金を支払うことになるという印象は拭いきれない。相滝においても、簡易水道の統一への障害としては同様の経済的な要因が大きい。また、相滝は他の2集落と大日川を挟んで位置しているため、距離的には隣接していても、心理的にはそれ以上の隔たりがあり、これも簡易水道統一の障害となっていることは否定できない。

本章では下水道に関しても記述したが、下水道は鳥越村が全面的に管理運営を担っている事業なので、この3集落にあっても大日処理区として1つのまとまりを形成している事に関して問題は発生していない。これに対して簡易水道の統一については、この地区の簡易水道の特徴ゆえに、集落間に様々な思惑や利害が発生してくるのである。またその背景として、下水道はあくまでも生活水準を高めるという性格のものであるが、上水道は日常生活において必要不可欠な水を供給するものであるという認識が働いているのかもしれない。特にこの

別宮地区、その中でも本章で中心的に記述してきた地域に関しては、水に対する意識が非常に高い事も、これを助長していると言える。また、城山簡易水道が集落の境界を越えて設立され、運営されているのに対して、この3集落の簡易水道統一が難航していることは、この地域に見られる集落としての一体感の強さを浮き彫りにしているのではなかろうか。簡易水道の統一に関してのインフォーマントのコメントに「それぞれの集落でしっかり運営できているから、簡易水道の統一をする必要はない」という内容のものがあったのが印象的だった。

VI. おわりに

鳥越村全体の今後のあり方として、市町村合併が話題となっている。鳥越村も白山麓1町5村の一員としてこれに当たっている。別宮地区の簡易水道は自治性が高いとはいえ、経営主体が鳥越村なので、この問題の影響は甚大である。他の白山麓の村や鶴来町との合併が実現すれば、現在の簡易水道のあり方にも改革のメスが入るであろう。それが水道区の統一であるのか、料金体系の基準設置であるのか、どのように変化するのは現段階では予測不能である。日本の地方自治体再編という歴史的な転換点にあたって、この地区に関する記述ができたことを幸いに思う。

注

- 1) 全国の下水道普及率は普及率の平均値ではなく、下水道利用人口／総人口で計算されているため、これを下回る石川県でも、都道府県単位で見ると比較的下水道が普及した県であるという結果が出る。ちなみに各都道府県の普及率平均値は約48%である。
- 2) これらの資料は、次節以下で記述する別宮地区の簡易水道に関する具体的な情報に対して全国的な目安を提示する。
- 3) 財団法人水道技術センター制作のホームページでの公開データでは、配水方式がポンプ加圧式とされているが、聞き取り調査におけるインフォーマントが城山簡易水道設立の中心的人物であり、城山簡易水道組合の組合長でもある点を考慮し、聞き取り調査での情報を本文では優先させている。
- 4) 組合長、役場常駐の補助職員および組合の会計役に支払われている。